

【報告要旨】

報告 1) ロックの同意理論における服従の論理について—名誉革命を背景にして—

武井 敬亮

ロックは、『統治論』の中で政治社会を設立する際には人々の同意が必要であると主張する。人々はプロパティの保全を条件に自然状態でもっていた権力を政治社会に委ねることに同意する。これにより、政治権力の権原は人々の同意の上に置かれ、仮に主権者が人々の同意に反して権力の行使を行った場合、人々はこれに抵抗することが正当化される。

ロックの同意理論における通説的な理解は以上のようなものである。しかし、ロックの同意理論を厳密に分析してみると、そこに別の側面（服従を導く論理）を見出すことが出来る。本報告では、ロックの同意理論におけるこの側面に着目し、名誉革命後のウィリアムの正当性をめぐる論争（忠誠論争）に際し、ロックが『統治論』の中で展開した同意理論（特に服従の論理）を用いてこの問題に対処しようとしていたということを、名誉革命後に書かれた文書「忠誠と革命について」の分析を行うことによって明らかにしたい。

報告 2) 共和主義思想における徳論—マーチャモン・ニーダムを中心に—

竹澤祐丈

本報告では、17 世紀イングランド共和主義の始祖ともしばしば称されるマーチャモン・ニーダム（1620-1678）の共和政論を歴史的背景と関連付けながら分析することによって、共和主義思想史研究における「徳論の問題」への応答を目指す。17 世紀の「徳論」は、（18 世紀に特徴的な）個人の望ましい資質を議論する卓越性の側面よりも、むしろ統治形態の変更への対応に関する決議論的な側面が強いことを明らかにしたい。そして、この特徴は、ハリントンにも引き継がれていることを示したい。

報告 3) 動物解放は新しい道德直観になるか？

伊勢田哲治

従来型の動物愛護運動と一線を画する動物の権利運動は、英米でまず盛り上がり、世界へと広がっていった。それと同時に、運動の理論的背景（動物倫理）においても大きな変化が起こりつつあるように見える。従来日本で紹介されてきた動物倫理の立場は、ベンサムを起点とし現代のシンガーらに受け継がれた功利主義の伝統と、ヘンリー・ソルトらを源流としトム・レーガンを現代における代表者とする権利論の流れである。しかし、最近では、カント主義者のコースガード、徳倫理学者のハーストハウス、潜在能力説のナスボーム、ケア倫理学者のドノヴァンなど、さまざまな立場の倫理学者たちが動物の権利や動物の解放を支持する議論を行っている。これらの議論は、それぞれの立場から自然に導かれてきたというよりは、動物の権利運動が世界的な潮流となる中で理論の方がそれにあわせることを要請されたかのようにも見える。だとすれば、動物の解放は倫理学理論をテストする側にまわるような新しい道德直観としての地位を確立しつつあると考えていいのだろうか。本発表では上に名前を挙げたような論者の議論の検討を通してこの問題を考えていきたい。